

I 実践

1 研究主題

差別や偏見をなくし、思いやりと助け合いの心をもって活動する児童の育成

2 主題設定の理由

本校は、1クラス30人前後の単学級で、全児童171名の小規模校である。児童は家庭的な雰囲気の中で明るくのびのびと学校生活を送っているが、クラス替えもないため、学級の人間関係が固定化・序列化しがちである。そのため、一度友達関係が崩れると、学校生活への意欲が低下したり、適応できなくなったりしてしまう。

そこで、人と人のつながりを大切にできるような環境作りや、受容的・許容的な学級経営を通して、自己肯定感を高め、一人一人がかけがえのない存在であるという人権を尊重する心を育てたいと考え、本主題を設定した。

特に、低学年では、誰とでも仲よく生活すること

中学年では、助け合い、励まし合って活動すること

高学年では、相手の立場や気持ちを考えて行動することを目標とした。

3 実践の内容

(1) あいさつ運動への取り組み

ア 児童会縦割り班での朝のあいさつ運動

あいさつの大切さを知り、心のこもった気持ちのよいあいさつができるようにするとともに、児童同士、教師と児童が、あいさつをすることによって心を通わせ、好ましい人間関係をつくることのできるようにすることをねらいとしておこなっている。たてわり班活動（1年生から6年生までの20名程度のグループ、8班編制）の一つとして、毎月月初め二日間児童の登校時間に実施している。



イ さわやかマナーアップキャンペーンでの活動

「友達や地域の人に気持ちのよいあいさつをしよう」をテーマに、地域へのマナーアップ推進事業の理解啓発と地域のマナーの向上を目指して行っている。11月の月初めに、学校の正門前の交差点や学校付近の交差点など3カ所で行った。5・6年全児童、本校職員、中小路コミュニティー推進会や駒王中学校の教職員・生徒、日立一高教職員・生徒、明秀学園高等学校教職員・生徒、中小路幼稚園職員、そして中小路小学校PTAの協力を頂き地域が一体となっていくことができた。地域の方々と一緒に、通りを歩く人々に気持ちのよいあいさつをし、地域の一員としての自覚を高めている。



(2) 人権に関する募集への応募

ア 人権メッセージへの全員参加

中高学年では、道德の時間を利用して人権について考える時間を持ち、作品に取り組んだ。全員がメッセージを考えることで、人権について意識を高めることができた。低学年では、人権について「みんななかよく」をテーマにしたお話を聞いて話し合いをし、学年便り等で家庭の協力を得て親子で作品に取り組んでもらった。代表者の応募と全員の作品を掲示することで、人権尊重の意識が高まるようにした。



イ 家族のきずなエッセイへの参加

道徳の時間に、家族について考え、家族のよさに気づき、家族への思いを伝えるため、感謝の気持ちをエッセイにまとめた。どの作品も心がこもっており、よくできていたが、その中で特によいものを代表として応募した。

(3) 異学年交流活動

異学年による集団活動を通して、子供たち同士のつながりや互いを思いやる心を育てることをねらいとして次のことを行った。

ア たてわり班ランチ（1，2学期にランチルームにて）

イ たてわり班遊び（学期に一度）

ウ たてわり班対抗スーパーおにごっこ（1学期）

エ たてわり班対抗ドッジボール大会（2学期）

オ たてわり班縄跳び大会（3学期）

カ 草取りボランティア，落ち葉拾いボランティア（1・6年，2・5年，3・4年の異学年による活動）



4 実践の成果

たてわり班による朝のあいさつ運動では、1年生から6年生まで一緒にあいさつを交わすことで、互いに協力し合う心が育ってきている。あいさつをする側とされる側の両方を経験することで相手の気持ちを考えることができ、あいさつの大切さを感じることができていた。また、上級生がリーダーシップを発揮して、下級生の面倒を優しく見ていた。また、上級生が中心となり、あいさつ運動で使うたすきや旗、あいさつを呼びかける札の準備をし、活動後は実施状況の報告をして次の班の活動へとつなげていった。

さわやかマナーアップキャンペーンのあいさつ運動では、たくさんの方からあいさつが返ってきた。自分からあいさつしてくれる高校生もいて、継続して実施してきた成果が表れているのを感じる。たくさんの方からあいさつが返ってくると、児童もやる気が出て、大きな声であいさつをすることができた。また、地域の方々と一緒にあいさつをすることで、地域の一員としての意識が高まった。この活動は、コミュニケーションを図る上で大いに役立っていると思われる。

人権に関する作品応募では、自分の思いを言葉に表現し作品にすることで、改めて周囲の人への感謝の気持ちを意識することができた。友達の作品を紹介したり、掲示して読み合ったりすることで周囲への感謝の気持ちや、助け合い、仲良くしようという気持ちが高まった。さらに、このような応募を保護者に知らせることで、保護者に対する人権の啓発に役立っている。

縦割り班活動では、それぞれの活動で高学年が低学年をリードする姿が見られた。たてわり班ランチでは、6年生が中心となってランチルームの準備を行ったり、1年生の教室に迎えに行ってお盆を持ってやったりと楽しく食べられるように気を配り、片付けも協力して行った。スーパーおにごっこでは低学年の手を引いて並ぶ場所を教え、ドッジボール大会では、ボールがとれない児童に回して投げさせるなど、ゲームを楽しめるようにしていた。

II 今後の課題

- 1 児童が学んだ一つ一つのことをどれだけ深く受け止め、日常生活の中で生かしているかが難しいところである。学習や体験を通して思ったり考えたりしたその気持ちを、持ち続けられるようにしたい。そのため、学校教育活動全体を通して、一人一人をよく観察し、褒めて、認めて、励ますことを繰り返し行っていく必要がある。
- 2 今後も、思いやりの気持ちを持ち、相手の立場や気持ちを考えて行動できる児童の育成を目指して、地域や家庭とのより一層の連携が必要である。